

市場構造と最適な環境政策手段に関する理論的研究

森, 大建

<https://doi.org/10.15017/1931690>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (経済学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	森 大建			
論文名	市場構造と最適な環境政策手段に関する理論的研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	藤田 敏之
	副査	九州大学	教授	三浦 功
	副査	九州大学	准教授	宮崎 毅

論文審査の結果の要旨

本論文は、環境政策手段の選択問題、つまり政府と規制対象である企業の間情報非対称性が存在する場合に、価格規制と数量規制のどちらが環境政策として効率的であるかという問題を分析することを目的としている。この問題はこれまで多くの研究がなされており、企業の汚染限界削減費用曲線と環境の限界外部費用曲線の傾きの大小によって相対的効率性が決定されることが示されているが、森氏の論文の特徴は、さまざまな市場構造のもとでの規制を扱っている点、また価格・数量規制を併用する混合規制を考慮している点である。

論文は6つの章からなる。1章では研究の背景や目的、2章では先行研究のレビュー、3章では予備的な研究成果の説明、6章では結論が記述されており、核となるのは4章、5章である。

4章では、1つの支配的企業と多数のプライステイカーであるフリンジ企業が混在する市場において支配的企業のみが規制対象となる状況を分析し、効率的な規制が、直接の規制対象ではないフリンジ企業の限界削減費用曲線の傾きにも依存することを示した。

5章では支配的企業が複数存在する場合に、支配的企業の一部に価格規制、残りに数量規制を実施する混合規制も検討の対象に加えている。分析の結果として、3タイプの規制はすべて最適になりうること、最適な規制はフリンジ企業の限界削減費用曲線の傾きのほかに、支配的企業の数、混合規制における混合率にも依存することが示された。これらはすべて従来の研究では明らかにされていない帰結である。

本論文は環境政策手段の選択問題において、既存の研究に依拠しながらもそれらをより現実的な設定のもとで拡張し、新たな理論的知見を得たという点で評価される。

以上の点から、本論文調査会は森大建氏から提出された論文「市場構造と最適な環境政策手段に関する理論的研究」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。